

連続コラム

— 光秀の源流を探る —

第6回 光秀と妻木氏② 妹

光秀には、「御妻木殿」と呼ばれた妹がいたことが知られています。当時の武家では、女性を実名で呼ぶことを憚り、実家の姓で呼ぶことが多かったため、御妻木殿は妻木氏の出身だと考えられます。光秀の妻の妹とされることが多いこの御妻木殿とはどのような女性だったのでしょうか。

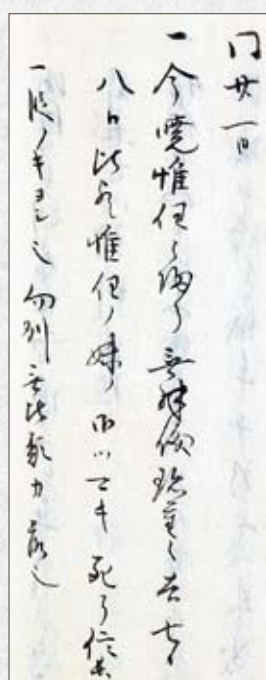
御妻木殿は、天正5～9（1577～81）年にかけて、吉田兼見の「兼見卿記」、山科言経の「言経卿記」、興福寺塔頭多聞院の「多聞院日記」などに記録が残っています。また、興福寺と東大寺の裁判記録である「戒和上昔今縁」には、御妻木殿が両寺の紛争解決に重要な役割を果たしたことが記されています。興福寺からの訴えを御妻木殿が信長へと取り次ぎ、信長は御妻木殿を通じて光秀へと裁決方針を伝えていきます。判決までには紆余曲折もありましたが、興福寺側は御妻木殿と連絡を取り合いながら、最終的に勝訴を勝ち取りました。

この訴訟記録から、御妻木殿は信長のそば近くに仕え、安土・坂本・京を行き来しながら、光秀と信長を密接につなげるパイプ役を担っていたことがわかります。位の高い公家である兼見や言経らも御妻木殿には相当の敬意を払って接しているため、信長の女房衆の中でも重要な地位にいた女性であることは間違いありません。織田家中では新参だった光秀の急速な出世の背景には、信長の意向を詳細に知ることを可能とした御妻木殿の存在があったのです。

光秀の活躍を陰から支えていた御妻木殿は、天正9（1581）年8月に亡くなりました。多聞院日記8月21日の項には、信長お気に入りの御妻木殿が亡くなり、光秀が著しく落胆した様子が記されています。御妻木殿を失った光秀は、その死後1年も経たないうちに、本能寺の変を起こします。光秀と信長、双方にとって御妻木殿は掛け替えのない大切な存在だったのでしょう。

多聞院日記（写本 多聞院日記略）

天正9（1581）年8月21日部分を抜粋  
東京大学史料編纂所蔵



同廿一日

今曉惟任被帰了、無殊儀、珍重く、去七日  
八日ノ比歟、惟任ノ妹ノ御ツマキ死了、信長  
一段ノキヨシ也、向州無比類力落也

【意訳】

同21日

早朝、惟任（光秀）殿がお帰りになった。特別の問題も起こらず、めでたいめでたい。去る7日、8日の頃か、惟任殿の妹の御妻木殿が亡くなられた。この方は、信長様が一際お気に入りだった方のため、向州（光秀）殿は例えようもないほど落胆なさっていた。